
幼児期と児童期をつなぐ 接続期の教育についての一考察

小熊 真弓

Study of the Conjunctive Education between Infancy and Childhood

Mayumi OGUMA

キーワード：スタートカリキュラム、アプローチカリキュラム、指導計画

1 はじめに

2017年3月に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が一斉に改訂された。この改訂では3法令が同時に行われたことに大きな意味がある。同時に行われたことは幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園に通う乳幼児に、施設は違っても同じ教育・保育を行うことを強調している。また、小学校の学習指導要領の改訂も幼稚園・保育所・こども園と同年に行われている。子どもたちを取り巻く社会や生活状況は著しく変化しており、成長していく子どもたちの未来には多くの課題が生まれ、それに対応していく力を蓄える必要がある。子どもたちの未来に向けて生きる力を学校教育の中で身に付けるために幼稚園・保育所・小学校・中学校の改訂が同時に行われたのである。

乳幼児期の教育において、子どもたちが生きていく社会の変化や課題に対応できる力を育むには、乳幼児期の特性である遊びを通して総合的な指導の下に主体的に学ぶ様々な体験活動がより重視される。

改訂では前文の中に、幼児期の教育については、教育基本法第11条に掲げるとおり、生涯に渡る人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならないこととされている。

また、新しく幼児期の教育の中で育みたい資質、能力及び幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が加わっている。そして、生きる力の基礎を育むため、幼児教育の基本を踏まえ次に掲げる資質・能力を一体的に育むように努めるとされている。この資質・能力は「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」という3つの柱から成り立っている。これは小学校、中学校、高等学校を通じて育成を目指すために同じ視点で表されている。資質・能力は幼児期に始まって小・中・高と伸びていく中心的な子どもの在り方であり3つが縦に貫く、すなわち幼児教育が小学校以降の教育に貫いていくことがはっきりと表されている。さらに幼児教育では、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が10の項目で表現されている。この10の姿を幼児教育側からだけでなく、小学校のスタート時点からも共通に把握することが、幼保小の接続にとって重要である。

2 これまでの幼保小連携の実態

2000年3月に当時の文部省から研究委託された国立教育研究所が「学級経営をめぐる問題の現状とそ

の対応」の中で「小1プロブレム」を「小1問題」という名称で取り上げ、2001年に文科省「幼児教育振興プログラム」の中で、幼稚園と小学校の連携方策の開発、幼稚園と小学校の連携を主軸に小1プロブレムの克服・予防に有効な手立てが多く議論や提案の中でなされてきた。

「小1プロブレム」として取り上げられてきた1年生の実態では、1年生になった子どもたちの中に、集中力に欠ける、授業時間中に座ってられない、自分の感情コントロールできず、集団行動がとれないなどの実態が挙げられた。これらの姿に対して、就学前の幼児教育の在り方を見直す必要があると考えられた。幼児教育で大切に培ってきた、一人一人に応じる教育や好きなことを自分から見つけて主体的に遊ぶ教育、教師が一人一人に応じた援助を行う教育など、遊びを通して総合的にねらいが達成されるようにする教育が、小学校に入学してからの教育と差があり子どもたちの戸惑いにつながると考えられた。

そこで2008年に改訂された幼稚園教育要領には幼稚園と小学校の円滑な接続のため幼保小の連携を図るようにすること、接続において相互に留意する旨が規定された。改訂を受けて幼稚園、保育所、小学校は子どもたちの交流や教師同士の学び合いなどの機会を設けて取り組んできた連携協力をより一層深める努力をしてきた。

実際に行われている幼保小交流では、子どもたちの交流、教師間の学び合いを年間計画として位置付けて行っている。これらの交流では課題や内容、成果を各施設の教員が集まり話し合いながら進め、互いの教育内容の見直しや交流ごとに評価をして次に生かす手立てを見出すようにしている。ここで学び合ったことを幼児教育側の指導計画、小学校側の主に生活科の授業に取り入れている。近年保育所（園）の増加や様々な地域に通う幼稚園児がいることなどから、幼保小連携が積極的に進められている地域と、就学前施設が広範囲に及ぶことで子どもたちの交流が限定されている地域があり、交流経験に差が生じていることも事実である。

3 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、 小学校学習指導要領の改訂から接続期の教育を考える視点

2017年の改訂に際し、文科省は幼児教育と小学校教育との接続に関して次のようにまとめている。

- 小学校低学年は、学びのゼロからスタートするわけではなく、幼児教育で身に付けたことを生かしながら教科等の学びにつなぎ、子どもたちの資質・能力を伸ばしていく時期である。
- 幼稚園教育要領においては、5領域において資質・能力の3つの柱に沿って内容の見直しを図ることや、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を位置付けることとしている。こうした改善を踏まえ、小学校教育においては、生活科を中心としたスタートカリキュラムを学習指導要領に位置付け、その中で、合科的・関連的な指導や短時間での学習などを含む授業時間や指導の工夫、環境構成等の工夫も行いながら、幼児期に総合的に育まれた資質・能力や、子どもたちの成長を、各教科等の特質に応じた学びにつなげていくことが求められる。
- その際、スタートカリキュラムにおける学習を、小学校におけるその後の学習に円滑につないでいくという視点も重要である。

そこで、幼児教育の中で育成すべき資質・能力の3つの柱に基づき、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を明確にした教育内容の見直しを行う中で、幼児教育側から小学校に接続することを意識した指導計画、特に小学校へのアプローチカリキュラムを改善していく必要がある。また、小学校側からは、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を基に幼児期の教育をつなげたスタートカリキュラムを見直し充実させることが必要である。

特に改訂の中で明らかにされた幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を小学校教育のスタートにつな

いでいくという観点から、双方の教育内容を見直す視点を明らかにしたい。

4 小学校へのアプローチカリキュラム

すでに就学前の各施設（幼稚園、保育所、認定こども園）の指導計画については、小学校就学を見据えて5歳児の2学期後半から3学期にかけて、健康（生活習慣の見直し）、人間関係（集団生活における人との関り）、環境（環境に好奇心や探求心をもち生活に取り入れる）、言葉（自分の思いを相手に言葉で伝える）、表現（豊かな感性や創造性）など5領域における接続期の教育内容の見直しを行いながら教育を進めている。更に今回改訂された中に、幼児教育を通じて育みたい資質・能力の3つの柱が小学校以降の教育に貫かれていくことから、3つの柱と5領域、幼児期の終わりまでに育ててほしい姿を整理し、指導計画を見直していくことが、小学校への円滑な接続につながるものと考えられる。

そこで、習志野市立袖ヶ浦こども園の指導計画を例にして、小学校教育につながる3つの柱を5歳児後期の指導計画の見直しを通して考えてみる。

（1） 幼児教育において育みたい資質・能力（3つの柱）

- ① 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分ったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- ② 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- ③ 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

これらの資質・能力は教育要領のねらい及び内容に基づき、幼児の発達の実情や幼児の興味や関心等を踏まえながら展開する活動によって育むものとされている。

（2） 指導計画のねらいの見直し

指導計画のねらいが、幼児教育において育みたい資質・能力と照らし合わせて幼児の発達に応じた姿になっているか、また、小学校への接続という観点から見直す。

5歳児4期（11月～12月） ○～見直したねらい 下線～変えた部分 ☆～見直す内容
（ねらい）

- ① イメージに向かい表現することを楽しむ。

↓

○個々がもつイメージに向かって、自分なりに考えながら表現する。

☆個々が自分のイメージに向かうことは基本であるが、5歳児4期では更にイメージしたことを自分なりの方法でどのように表現したらよいか、その表現について試行錯誤しながら取り組んでいくことが発達に応じた姿と思われる。

- ② 友達と共通の目標に向かい、協力して遊びを進める。

↓

○友達と考えた目標に向かってどのような方法で取り組むか、考えたり話し合ったりして力を合わせて遊びを進める。

☆友達と協力して遊びを進める中で、言葉で伝え合うことや相手の考えを聞くことが5歳児4期では大切である。協力する中に友達と互いの思いを伝え合いながら力を合わせて遊びを進めることを重視したい。

- ③ 秋から初冬の季節の変化に関心をもつ。

↓

○秋から初冬への自然の移り変わりを感じ取り、自ら関わりながら遊びや生活に取り入れようとする

る。

☆自然の変化に関心をもつ心や色々な現象に触れることに好奇心をもち、気付く、感じる、関わるなどの意欲や態度を育てることが、就学後の学習意欲につながっていく。

5歳児5期（1月～2月）

（ねらい）

- ① 挑戦したり試したりする中で、やり遂げた満足感を味わう。

↓

○自分の目標に向かって挑戦したり試したりする中で、達成感や満足感を味わい自信をもつ。

☆自分から目標をもち、諦めずに何度も挑戦したり、繰り返し試したりする経験を通して、できたという喜びややり遂げたという達成感を味わうことで、自分に自信をもつことができる。この達成感は小学校教育の中で諦めないことや自分の力でできるという自己有能感につながり生きる力を育む基礎となる。

- ② 友達と考えを出し合い、協力して生活や遊びを進めていく。

↓

○グループの仲間や学級全体で目的をもち協力して遊びを進め、充実感を味わう。

☆気の合う仲間同士や学級全体で取り組む遊びにおいて、互いに共通の目的に向かいながら協力して遊びを進める中で、友達や今まで過ごしてきた学級の仲間と協力し合う力が育ってきている。皆でできたという充実感を味わう経験を積み重ねていくことで、就学前の施設から小学校へと環境が変わっても対応できる力が育っていくものとする。

- ③ もうすぐ1年生という期待や自覚をもつ。

↓

○1年生になる喜びや期待、自覚をもって園生活を楽しむ。

☆3学期になると家庭での入学準備等で1年生になるという喜びや小学校へ行くという期待が高まる。自覚そのものは後から感じてくる気持ちであろうが、園生活を修了するという達成感から期待と共におのずと生まれてくるであろう。それらの喜びや自覚は入学後の環境の変化にも対応する力となっていくであろうことから身に付けていきたいと考える、

- ④ 冬から春にかけての自然現象に関心をもつ。

↓

○冬から春にかけての自然現象の変化や植物の生長に気付き、自ら関わったり遊びに取り入れたりする。

☆寒い季節から徐々に春が訪れる季節の変化は体感だけでなく、植物の芽吹きなどからも気付くことができる。枯れて葉の落ちた樹木からの芽吹き、自分たちが植えた春に咲く植物の生長や変化などに自分から気づき、発見や喜びを味わうことや生活や遊びの中に取り入れることが探求心や自然への愛情をもつ心の育ちとなる。

5 スタートカリキュラム

「幼児教育において育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、幼児教育側と小学校が互いに理解することは接続期の子どもの姿の共有となり、滑らかな接続となっていく。特に小学校に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿～10項目」を接続期において継続し、小学校1年生の初めにおける姿と照らし合わせていき、スタートカリキュラムに取り入れていくことが必要と考える。

スタートカリキュラムとは、小学校入学後1か月間において、子どもが幼児期に体験してきた遊びの要素とこれからの小学校生活の中心をなす教科学習の要素の両方を組み合わせた、合科的・関連的な学習プログラムである。幼児教育で身に付けた意欲や自信を基礎として入学後の新しい生活において子どもは主体的に自分の力を発揮して小学校生活を送ることができる。

小学校教育要領の生活科の改訂の趣旨では、幼児期の教育において育成された資質・能力を存分に発揮し、各教科等で期待される資質・能力を育成する低学年教育として滑らかに連続、発展させること。幼児期に育成された資質・能力と小学校低学年で育成する資質・能力とのつながりを明確にし、そこでの生活科の役割を考える必要がある、と書かれている。小学校低学年生活科の教科目標は次の通りである。

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わりなどに気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関りで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしようとしたりする態度を養う。

生活科で育成することを目指す資質・能力は (1) では「知識及び技能の基礎 (生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何がわかったりできるようになったりするか)」を、(2) では「思考力、判断力、表現力等の基礎 (生活の中で、気づいたこと、できるようになったことを使って、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするか)」を、(3) では「学びに向かう力、人間性等 (どのような心情、意欲、態度を育み、より良い生活を営むか)」を示している。

〈育成を目指す資質・能力〉

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上に必要な習慣や技能を身に付けるようにする (知識及び技能の基礎)。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関りで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする (思考力、判断力、表現力の基礎)。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う (学びに向かう力、人間性等)。

生活科を中心にスタートカリキュラムを作成する上で、更に幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を接続期においてどのように捉えるか、幼児教育で育ててきた姿を小学校教育の接続期にどのように捉えるかななどを明らかにして指導計画を作成することが必要である。

6 幼児教育と小学校教育の接続期に共有する「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」

滑らかな接続ができるようにするには、幼児教育で育ててきた10の姿を小学校教育に接続していくために、双方が共通理解する必要がある。この10の姿は、幼児教育の中で幼児が育っていく姿であり到達目標ではない。幼児期においては個々の発達には個人差があり、発達に応じた指導を行っている幼児教育施設から小学校へと入学した時点では、発達過程を考慮してスタートカリキュラムが作成されることが望ましい。

そこで、幼児教育で育つ姿から小学校入学に引き継いで伸ばしていく力を継続して考えられるようにするために表にまとめてみた。(表1)

表1 幼児教育で育まれた10の姿を小学校に引き継ぎ伸ばしていく姿

	幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿	幼児教育で育つ姿	幼児教育から引き継いで小学校で伸ばしていく姿
1	健康な心と体	園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しを持って行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる	小学校生活の中で時間や空間に見通しをもち、主体的に伸び伸びと行動する。自ら見通しをもち運動に意欲的に取り組み心身の充実を図る。
2	自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。	自分ではできると自信をもって小学校生活が送れるように、諦めずに取り組むことや、根気強く学習に取り組む気持ちや態度を育てていく。自分が学んだことをわかったと自覚し喜びと自信がもてるようにする。
3	協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。	小学校の集団生活において、目的に向かって自分の力を発揮したり、先生や友達と協力し合ったりして学校生活の充実を図る。
4	道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。	友達と関わる中で、相手の気持ちを理解し、自分の思いを伝え合いながら仲間関係ができるようになる。きまりを守るためにはどのようにしたらよいか考えたり、友達とルールを作ったりして、自分たちで考えたきまりの中で生活が送れるようにする。
5	社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりを意識するようになる。	社会とのつながりを学び、自分の力でできること他に地域の人に支えられていることが分かるようになる。家族や地域の人と関わる中で、自分の気持ちだけでなく相手の思いに気付き、感謝の気持ちをもったり、触れ合う喜びを味わったりする。また、自分の力でできることは行い、自信をもって社会と関わるができるようにする。
6	思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予測したり、工夫したりするなど、多様な関わり方を楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自らから判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。	自ら考えなぜだろう、どうしてこうなるのだろうと疑問をもち、自分なりに予想したり試したりして考えて答えを導き出そうとする力を育む。 友達と一緒に考えを出し合いながら、よりよい答えを見つけていこうとする力を育む。
7	自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探求心をもって考え、言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への事情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。	身近な自然と出会い、育てたり観察したりしながら、事実に基づいて調べていくことで、疑問を解決したり、新たなことを知る喜びが味わえるようになる。 動植物に触れ、生命の尊さやいたわり、愛情などの気持ちをもつ。
8	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要間に基づきこれを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。	数や文字を学ぶことに意欲がもてるような板書や教材の工夫をする。身近な標識に気付き、その理解が高まるようにする。

9	言葉による伝え合い	先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。	様々な本との出会いを大切にし、情景を描きながら話の面白さを感じ取れるようにする。会話を重視し、相手にわかるような伝え方を身につけ、言葉による伝え合いが楽しめるようにする。
10	豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。	個々の感性や表現を認めることで自分の考えや思いを表す喜びが味わえるようにする。様々な事象に出会う中で、感動体験を大切に

これらの姿を幼児期から児童期へと引き継ぐために、幼児教育側と小学校の教師同士が接続期の教育や子どもの実態について話し合い、引継ぎを行っていくことが大切と考える。また、入学後も子どもたちの実態を見合ったり話し合ったりしていき、双方の指導計画の見直しに生かすことが必要であると考え

7 まとめ

幼児教育で積み重ねてきたものが小学校教育に生かされ引き継いで指導していくことができるよう、双方の教師同士の連携が重要である。幼稚園や保育所等は幼児教育の内容や子どもの育ちを具体的に小学校に伝え、子どもの育ちを互いに理解し合うことで接続期の教育が充実していくのである。

また、幼児教育側は小学校入学後の授業を幼稚園教諭や保育士が参観し、接続期における教育について実態を把握するとともに、引き継いだことが生かされているか実態を知ること、小学校は入学した子どもたちが新しい環境の中で自分の力を発揮し学ぶことの喜びが感じられているかを把握し、双方が幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を中心に話し合うことで評価し、次の課題を明らかにしていくことが大切である。

就学前の施設と小学校との連携には、それぞれの話し合いができるような時間の確保と研修の機会などが必要となる。担任同士だけでなく小学校や幼稚園、保育所など各施設が協力し合って学び合う機会を設けることで円滑な接続が図れると考える。

■参考文献

- ・幼稚園教育要領はどう改定されるか 文部科学省初等中等教育局幼児教育課 伊藤学司
- ・今後の幼児教育とは 無藤隆
- ・ここがポイント!三法令ガイドブック 汐見稔幸 砂上史子(フレーベル館)
- ・小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム(明治図書)
- ・幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿 無藤隆(東洋館出版社)
- ・小学校においてさらに伸ばそう幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿より～執筆・松寄洋子 監修～・無藤隆(東京書籍)
- ・習志野市立袖ヶ浦こども園指導計画